2024年度

札幌日本大学中学校
入学選抜試験
【B日程（1月9日）】

国　　語

試験時間　60分

1．指示があるまで，問題冊子（さっし）を開いてはいけません。
2．答えは，解答用紙に記入してください。問題は，一～二までであります。
3．試験監督（かんとく）の先生の指示に従って，試験を開始してください。
4．試験の途中で，トイレに行きたくなったり，気分が悪くなったりした場合は，手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5．試験開始の指示があってから，解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6．解答用紙には，解答以外を記入しないでください。
7．試験が早く終わっても，周囲を見回したり，横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8．机の上には，筆記用具以外は置いてはいけません。風邪（かぜ）などにより，ティッシュペーパーを使用したい場合は，予（あらかじ）め試験監督の先生に申し出てください。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ナツミとマキは、小学生のころ仲良しであったが、ナツミが中学受験に失敗したことをきっかけに、マキに見下されているように感じ、別々の中学校に進学して以来二人の行き来はなくなっていた。次の場面は二人が高校生となったある日、ナツミが帰宅するバスで偶然マキに出会い、「不幸の手紙」の話をしているところである。

「もしかしたら、不幸の手紙、来たの？」

「うん」

それを聞いたナツミは、少し迷ったあとで言った。

「わたしのところにも、来た」

「㋐うそ！」

「ほんと」

「いやね」

「㋑とってもいや」

ナツミは、昨日の夜、お父さんとお母さんの言い ⓐアラソいを耳にしているとき、わたしが不幸の手紙を出さなかったせいでこのまま離婚なんていうことになったらどうしようと不安を覚えたことを思い出した。そんなことになったら、きょうだいのいないわたしはどうしたらいいんだろう……。

「それって、最近のこと？」

マキちゃんが ⓑサグるような ⓒ口調で訊ねてきた。

「うん、最近」

「㋒こっちも最近」

互いにそう言い合うと、一拍置いてから二人はほとんど同時に大きな声を上げた。

「ということは！」

「ということは！」
　そして、マキちゃんが小さくうなずきながら言った。
「わたしたちの知り合いが出したのかもしれないね」
「そうかもしれない」
「小学校の同級生かな」
「たぶん、そうじゃないかな」
「㋓誰だろう」
「誰だろう……」
　ナツミに届いた不幸の手紙はまちがいなく女の子が書いた字だった。ナツミは小学校のときの同級生の女の子を思い出そうとした。あんな手紙を出しそうな人といえば……。
　考えていると、マキちゃんが訊ねてきた。
「誰かに出した？」
「出してない」
「出す？」
「うーん、出さないつもりだけど」
「㋔でも、出さないと不幸になるって……」
「そんなのうそ、ⓓメイシンよ」
　ナツミが言うと、マキちゃんが珍（めずら）しく自信のなさそうな声を出した。
「もし、ほんとに不幸なことが起きたらどうするの？」
　そのとき、もしかしたら、［　　×　　］という気がした。だから、最初にわたしの顔を見て、あんなに驚（おどろ）いたのかもしれない。
「ねえ、マキちゃん……」
　ナツミがそれとなく訊ねようとすると、すぐうしろの席に座っているおばあさんが声を掛（か）けてきた。

「ちょっと、あなたたち」
「あっ、はい」
ナツミは返事をしながら、しまったと思った。少し大きな声でしゃべりすぎてしまったかもしれない。うるさいと注意されることになるのだろう。その前に、すみません、とⓔ謝ろうとしたが、おばあさんが［ I ］にしたのはまったく違うことだった。
「あなたたち、どうするつもり」
何を言われているかわからず、ナツミはマキちゃんと顔を見合わせた。
「不幸の手紙よ」
どうやら、おばあさんはこちらの話を聞いていたらしい。
「出しなさい」
二人が黙っていると、おばあさんは繰り返した。
「出した方がいいわよ」
「でも……」
ナツミが言いかけると、Ⓐ異様に低い声でおばあさんが言った。
「出さないとあとで後悔するようなことが起きるわよ」
するとその横に座っていたおじいさんがおばあさんに向かって小さな声で言った。
「やめなさい」
「あなたは黙ってて！」
Ⓑおばあさんが鋭い声ではねつけた。その声は静かなバスの中でことさら大きく響いた。ナツミには乗客の全員がこちらに意識を向けたのがわかった。
「もしかしたら何も起きないかもしれない。でも、万一起きたとき、後悔するわよ。出しておけばよかったって」
Ⓒおばあさんが低い声で言い、ナツミはマキちゃんとまた顔を見合わせた。
「そんなこと、起きますか」

マキちゃんがいくらか体を斜めうしろに向けながら言った。
「子供を亡くした人がいるわ」
Ⓓおばあさんがまったく抑揚のない調子で言った。
「手紙を出さなかったからよ」
「……」
二人が黙っていると、Ⓔおばあさんはひとりごとのようにつぶやき出した。
「ああ……出せばよかった……出していれば……あんなことは起こらなかったのに……言うことを聞いたばかりに……あなたは……わたしひとりで何もできなかったのに……」
おじいさんがもういちどおばあさんに言った。
「やめなさい」
すると、Ⓕおばあさんは急に気がついたような声の調子で訊き返した。
「何がですか？」
「もういいから」
「どうしてですか？」
「もういいから、やめなさい」
おじいさんの声に厳しい響きがこもったように聞こえた。Ⓖおばあさんは、さっきとは違って、脅えたような声を出した。
「わたしは……ただこのお嬢さんたちに注意をしてあげているだけなのに……」
そして、それきり黙り込んでしまった。
バスの乗客が［Ⅱ］をそばだてているのがわかった。ナツミはマキちゃんとしゃべるのをやめて、窓の外を見た。マキちゃんはカバンから携帯電話を取り出してメールをチェックしはじめた。
やがてうしろの席でおじいさんが［Ⅲ］を伸ばして降車用のブザーを押すⓕケハイがあり、バスが次の停留所で停まると立ち上がった。おばあさんは、ナツミたちの席の横を通るとき、立ち止まって声を掛けた。
「出すのよ」

二人は黙って軽く［Ⅳ］を下げた。

バスが発車すると、マキちゃんが小さな声で訊ねてきた。

「手紙、いつ来たの？」

「えーと、三日前」

「うちも三日前」

本当だろうか。もしそうだとしたらマキちゃんが出したのではないということになる。

「もう時間がないよね」

マキちゃんが憂鬱（ゆううつ）そうに言った。

「まあね」

「まあねって、明後日（あさって）までには出さなくちゃいけないんじゃない」

「どうして」

「あれって、五日以内に出さないといけないんでしょ」

「五日以内？」

「五日以内に出さないと不幸になるって書いてあったでしょ」

「五日以内なんて書いてなかった」

「うそ」

「ほんと」

「じゃあ、なんて？」

「一週間以内に出せって」

「五日以内に三人に出せ、でしょ？」

「違うよ、一週間以内に五人に出すの」

そう言ったとき、ナツミは①すごく重要なことに気がついた。

「そうか、別の種類の不幸の手紙なんだ」
マキちゃんも弾(はず)んだ声で言った。
「違う人から届いたんだ」
だとすれば自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが出したのではないということになる。マキちゃんの声が弾んでいるのも、わたしが出したのではないとわかったからかもしれない。わたしが疑っていたのだからマキちゃんがそう思っていたとしても不思議ではない。
「いいなあ」
マキちゃんが羨(うらや)ましそうに言った。
「何が」
「そっちは、一週間に五人でしょ、こっちは、五日に三人だからたいへんだよ」
「どっちも、よくないよ」
そう言いながら、ナツミは思っていた。出さなかったら本当に不幸がⓖオトズれるのだろうか。うしろに座っていたかわいそうなおばあさんのように。
でも、たぶんそうじゃない。あのおばあさんが不幸の手紙を出さなかったから子供が死んだんじゃない。出しても出さなくても死んだに違いない。かわいそうだけど、その子はそういう運命だったのだ。
おばあさんがかわいそうなのは子供が死んでしまったからではない。もちろん子供に死なれるというのはとてもつらい経験だろう。でも、人が生きていく中で、大切な誰かを失うということはⓗゼッタイにありえないことではないはずだ。おばあさんが本当にかわいそうなのは、子供が死んだのは自分が不幸の手紙を出さなかったからだと思っていることだ。そうやって、いつまでも自分を責めていることだ。誰が出したか知らないけれど、自分がどれほどひどいことをしたかわかっているのだろうか。
もし自分が五人に出すとすれば、その人たちを②あのおばあさんと同じような悲しい目にあわせてしまうことになるかもしれない。
やめよう、とナツミは思った。わたしは出すのをやめよう。たとえ、お父さんとお母さんが離婚するようなことになっ

ても、期末試験の結果が絶望的なものになっても、それ以外に思いもよらないような不幸に見舞われても、それを不幸の手紙のせいにするのはよそう。不幸の手紙を出さなかったからだなんて決して思わない。それはそうなる理由があっただけなのだ……。

気がつくと、次はナツミが降りる停留所だった。慌てて窓の横についている降車用のブザーを押した。マキちゃんはその次の停留所で降りるはずだった。

バスが停まると、通路側に座っているマキちゃんが席を立ってくれた。ナツミが出やすいようにしてくれたのだろうと思っていると、小さな声でいった。

「［　　Y　　］」

どうしてかナツミには理由がわからなかった。

開いた降車用のドアからまずマキちゃんが降り、続いてナツミが降りた。

マキちゃんは降りたところに立ち止まり、バスが発車していくと、きっぱりとした口調で言った。

「わたし、出さない」

それを聞いてナツミは嬉しくなった。そして、マキちゃんと同じようにきっぱりと言った。

「わたしも、出さない」

二人は顔を見合わせると、少し①テれたように笑い合った。

「じゃあね」

マキちゃんはそう言って、次の停留所の方に向かって歩きはじめた。

「じゃあね」

ナツミもそう言って、反対の方向に歩き出した。

歩きながら、ナツミは自分の気持ちが明るくなっていくのがわかった。そして、こう思った。わたしたちは背中を向けて反対方向に歩いているけれど、小学生のとき一緒に神社に行ったときのように手をつないで歩いているような気がする。③ナツミにはなんとなくそのときのマキちゃんの手のひらの感触が思い出せそうな気がした。

マキちゃん、大丈夫。不幸なんて、きっと来ないから。ナツミは心の中でつぶやいた。

バス通りを渡るため横断歩道の信号が変わるのを待っていると、向こう側の歩道の脇にⓙユウビンポストが立っているのが見えた。

カバンを左手に持ち替えたナツミは、右手でピストルのかたちを作った。そして、④人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した。

「ダーン！」

（沢木耕太郎『あなたがいる場所』新潮社）

問一　═══線部ⓐ～ⓙのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二　［Ⅰ］～［Ⅳ］に入る語として最も適当なものを、次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　頭　　イ　目　　ウ　耳　　エ　鼻　　オ　口　　カ　手　　キ　足

問三　═══線部㋐～㋔の文のうち、「ナツミ」が話しているものはどれですか。次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「うそ！」　　イ　「とってもいや」　　ウ　「こっちも最近」　　エ　「誰だろう」

オ　「でも、出さないと不幸になるって……」

問四　［Ⅹ］に入る文として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　わたしが書いた不幸の手紙がマキちゃんのところに届いたのではなか

イ　わたしがマキちゃんのところに手紙を書いたと思っているのではないか

ウ　わたしもマキちゃんも知らない誰かが不幸の手紙を書いたのではないか

エ　自分だけでなくマキちゃんのところにも不幸の手紙が届いたのではないか

オ　自分のところに届いた不幸の手紙はマキちゃんが書いたのではないか

問五　七か所ある〜〜線部Ⓐ〜Ⓖの声の調子から読み取れるおばあさんの様子はどのようなものですか。最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　突然起こった不幸に、やり場のない怒りを感じている様子。
イ　自分の感情を抑えきることができず、心が乱れている様子。
ウ　不幸の手紙が届いた二人に対して、親身に心配している様子。
エ　自分に降りかかった不幸が再び起こることを恐れている様子。
オ　二人が自分と同じ不幸を抱えていることを悲しんでいる様子。

問六　――線部①「すごく重要なこと」とありますが、それはどのようなことですか。本文中より三十五字以内でぬき出しなさい。

問七　――線部②「あのおばあさんと同じような悲しい目」とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　不幸の手紙を出すべきか、または出すべきでないかという悩みによって、貴重な時間を失ってしまうこと。
イ　自分に不幸の手紙を出してきたのはいったい誰であるのかという疑いにより、誰も信じられなくなること。
ウ　不幸の手紙を出さなかったことで、おばあさんの子供が亡くなってしまうという不幸が起きてしまったこと。
エ　わが身に起きた不幸は自分が手紙を出さなかったことにあると、不幸の手紙にずっととらわれ続けること。
オ　不幸の手紙を出さなかったこととは一切関係なく、運命によっておばあさんの子供が亡くなってしまったこと。

問八　Y に入る文として最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　わたし、出さない　　イ　わたしじゃないよ　　ウ　わたしも降りる　　エ　わたし次のバスにのる
オ　次のバスに乗ろうよ

問九　――線部③の「ナツミにはなんとなくそのときのマキちゃんの手のひらの感触が思い出せそうな気がした」とありますが、このときのナツミの心情の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　不幸の手紙は出さないとマキちゃんも同じ気持ちだったことで、小学生の時のように仲の良かった関係に戻（もど）れた気がして喜びを感じている。

イ　小学生以来久しぶりに会ったマキちゃんの手のひらの感触は昔と少しも変わっていなかったため、一緒に神社に行ったときを思い出してなつかしさを感じている。

ウ　ずっと仲直りしたいと思っていたマキちゃんと偶然仲直りをする機会に恵（めぐ）まれ、これからまた昔のように一緒に学校に通えると思うと嬉しくなっている。

エ　不幸の手紙を出さないことで自分に不幸が起こるのではと不安がっていたマキちゃんを心の中ではげましながら、自分の不幸も忘れようとしている。

オ　不幸の手紙を出さなかったからといって不幸な出来事など起こるはずがないと納得ができたことで、マキちゃんとの関係もよくなり清々（すがすが）しさを感じている。

問十　――線部④「人差し指の銃口を赤いポストに向けると、狙いを定めて声の銃弾を発射した」について

(一)　「赤いポスト」に「声の銃弾を発射」するとは、どのようなことを表していますか。「手紙」という語句を用いて十五字以内で答えなさい。

(二)　――線部④にはナツミのどのような気持ちが込められていますか。四十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしが五歳の頃から書を教わった先生は、※1上田桑鳩に字を見てもらうために、二十代で島根から京都に出て来たのだと、時々懐かしそうに話してくれた。

週に一度の書道教室で、先生はわたしに学校で習った漢字を尋ね、その字の象形文字となりたちを教えてくれた。そして課題を終えると、その週にあったおもしろかったことを訊かれ、そこから連想する一つの漢字やことばを考えて半紙に書くように言われた。

先生と話していると、だんだんことばが絞られていく。ただ、ことばが決まっても、①どうしてその字やことばを選んだのか話せるようになるまでは、字を書かせてもらえなかった。

彼女は何度も「どうしてその字を書きたいの」と訊いた。自分がなにに関心を持ち、そこからどうして、どうやってその字を連想したのか。その字から浮かぶイメージのなにが自分の関心や経験と結びついているのかと[A]問[A]答する。分かったことをまた先生に話す。それを繰り返していると、どうしてその字を書きたいのかという自分にとってのなにかが少しずつことばになって出てくるようになる。②そうやって書く字は、学校の習字の時間に書くものとも家で落書きするものとも違っていた。

それが一字書とわたしの出会いだった。

十歳の頃のことだ。背中に気配を感じたかと思うと、筆を持っている手に先生の手が重ねられる。自分の手を動かそうとすると、彼女の手に力が入り、筆先が紙から高く引き上げられる。手が、身体が強ばる。ぐいと持ち上げられた手につられて、肘、腕、肩、そして肩甲骨の辺り、上半身が動く。それから筆はゆっくりと次の画に着地する。

③わたしは彼女の大きな動きに呆然とする。先生はわたしの手から筆を取ると、紙の上のなにも書かれていないところと、紙を見下ろす顔と紙の間の空間に筆を踊らせ、「筆はここも動いたでしょう」と言った。

「筆が動いた軌跡は、墨色になって紙の上に残る筆跡だけじゃないのよ。④そこには筆を動かしている身体の軌跡も含ま

れるの。身体の軌跡は、紙から筆が離れて、次に着地するまでの空間――余白に残っているのよ。だからね、墨で書かれた筆跡を支えているのは、余白なの。⑤余白がどれだけ豊かか、それをよく見なさい」。彼女はそんな話をしてくれた。

（中略）

大人になるにつれ、書きたい字について、子どもの頃のように自分が思い考えるすべてを素直に話すことがだんだん難しくなっていった。ことばにまとまりきらない思いを、一つの字に表そうとすると、そこからこぼれ落ちていく考えやことばの方が気になってしまう。小さな頃から疑いもなく続けてきた一字書が、⑥薄っぺらで頼りない表現に感じられた。

その頃、東北を地震と津波が襲い、それから放射能の問題が立ち上がった。毎日、いろいろなひとの声が聞こえてきて、自分の考えを選択するように迫られる機会が増えていった。まとまらない考えを絞り出すように選ぼうとするほど、選ぶことでこぼれ落ちてしまう様々な存在に気づき、意識する。※2脆弱に思えていた一字を書くことと、どこか似ていた。なんらかの選択に※3収斂させられ、その背景の軌跡が見えなくなってしまうことも多い。⑦今の状況にこそ、一字書の弱さを抱えた表現は必要なのではないかと考えるようになった。

震災から半月経ったとき、そうやって聞こえてくる声（聲）というものを書きたいと思った。「聲」の字義は、ひとびとが神に問いかけるために打つ太鼓の音と、それに応える神の声だとある。この字義を読みながら、⑧問いかけ、返ってくる声を求めて打つのは、太鼓でなく自分自身だった。自分を打って聞こえて来る自分の中の交わらないいくつもの声を書こうと思った。紙に筆を打ち下ろし、それからじりじりとこすりつけ、繰り返し〝声〟と書く。⑨書けば書くほど、どの〝声〟が自分にとってのいまの聲になり得るのかわからなくなり、そのまま書き続けていると用意していた紙はなくなった。辺りには書いた〝声〟が散らばり、取り囲まれていた。

その中で目に留まったのは、⑩紙には折り目がつき、皺が寄り、破れがあるものだった。そこに〝声〟が書かれたことで、紙の皺や破れの存在は薄れ、白さが際立つ。白い余白には書かれた〝声〟のかたちからこぼれた、未だことばにならない声が「書かれて」いた。

（華雪「余白」『ベスト・エッセイ２０１５』光村図書出版
ただし出題の都合上、一部表記をあらためたところがある。）

※１　上田桑鳩（うえだそうきゅう）……書道家。
※２　脆弱……もろくてよわいこと。
※３　収斂……ちぢむこと、ちぢめること。

問一　――線部①「どうしてその字やことばを選んだのか」とありますが、「その字やことば」がどういうものだから選んだのですか。「～ものだから。」につながるように本文中から十五字程度でぬき出して答えなさい。

問二　――線部②「そうやって書く字は、学校の習字の時間に書くものとも家で落書きするものとも違っていた」とありますが、ここで言う「そうやって書く字」とはどのような字ですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　幼い頃から抱き続けた書に対する強いこだわりが形となって表れた字。
イ　自分の興味の対象のみをひたすら追い求める中でぐうぜん発見した字。
ウ　うまさを気にせず、書きたいという思いに正直に従って書き上げた字。
エ　先生との対話をもとに、考えた結果ようやく手にすることのできた字。

問三　――線部③「わたしは彼女の大きな動きに呆然とする」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　先生の動きは思いもよらないほど身体全体を使ったものだったから。
イ　先生の動きは何かを極めた者特有の自信に満ちあふれたものだったから。
ウ　先生の動きは見る者からことばを奪うほど圧倒的で優雅なものだったから。
エ　先生の動きは自分にはまねすることができないほど複雑なものだったから。

問四　――線部④「そこ」は何を指しているか。文中より十字以内でぬき出して答えなさい。

問五　――線部⑤「余白がどれだけ豊かか、それをよく見なさい」とありますが、「余白」とは何か。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　書かれた部分から想像されるかくされた考えの道筋。
イ　伝えることができず心の奥にしまいこまれた思いの痕跡。
ウ　無口な人のことばから伝わってくる人間としての魅力の一端。
エ　何かを表現しようとする時に表現しきれないまま残された空間。

問六　――線部⑥「薄っぺらで頼りない表現に感じられた」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ことばにまとまらない思いのままの字を書いてもこぼれ落ちた疑問を拾えないと思いはじめたから。
イ　素直に思いや考えと向き合うことができず、書では表しきれないと気づきはじめたから。
ウ　ことばにできないものの存在を疑いはじめ、うまく表現するための方法を探しはじめたから。
エ　ことばにならないものをとりこぼしてしまう一字書の表現方法に限界を感じはじめたから。

問七　――線部⑦「今の状況にこそ、一字書の弱さを抱えた表現は必要なのではないかと考えるようになった」とありますが、どうして筆者は「弱さを抱えた表現」が必要だと考えるようになったのか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の考えを選ぶように迫られる状況においては、選ばれずこぼれ落ちたものの存在について考えることが大切だから。
イ　本当の意味での他人の痛みに共感するためには、弱さとはいったいどのようなものであるのかを考えぬく必要があるから。

ウ　誰もが強い者の立場をめざす競争社会においては、弱者の視点で物事を考えることが有益な結果をもたらすこともあるから。

エ　様々な意見が飛び交う中で自己を保つためには、厳選した一字に思いの全てをたくす一字書の力が不可欠だから。

問八　――線部⑧「問いかけ、返ってくる声を求めて打つのは、太鼓でなく自分自身だった」とありますが、ここで表現されている行為を簡潔に言い表したのが～～線部の四字熟語です。[A]に適切な漢字一字を入れなさい。

問九　――線部⑨「書けば書くほど、どの〝声〟が自分にとってのいまの聲になり得るのかわからなくなり、そのまま書き続けていると用意していた紙はなくなった」とありますが、「〝声〟」は何を表していますか。最も適当なものを、「聲」との違いに注意して、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の中にあふれている声の重なり。

イ　紙面の上に形になって表れた文字。

ウ　筆跡から浮かび上がってくる響き。

エ　声を題材に創作された芸術作品。

問十　――線部⑩「紙には折り目がつき、皺が寄り、破れがあるものだった。そこに〝声〟が書かれたことで、紙の皺や破れの存在は薄れ、白さが際立つ。白い余白には書かれた〝声〟のかたちからこぼれた、未だことばにならない声が『書かれて』いた」とありますが、筆者は「書くこと」についてどういうことに気づいたのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　書けば書くほど、皺のある字や破れのある字になってしまい、自分が書きたい「聞こえてくる聲」に応えることから遠ざかってしまうということ。

イ　紙を使えば使うほど、自分が表現していることのあいまいさばかりにとらわれてしまい、澄みきった心が濁ってしまうということ。

ウ　自分の中でうまく聞こえてこない他の人の声を形にすることは、皺や破れより、紙の持つ白さを意識して筆を運ぶことだということ。

エ　うまく書けなくて散らかした紙の皺や破れを見ているうちに、自分が書いた字よりも書かれていない他の部分の存在が意識されてきたということ。